

ワッキーのバレンタイン

Wackey's Valentine

彼が「ワッキー」と呼ばれていたのは、人並はずれてワキガが臭いからだ。あだ名の由来を知らないのは本人だけで、『バンド・ワゴン』に飲みにくるような連中の間では周知のことだったんだよ。

でもその由来について、ワッキーに告げようなんてヤツはいなかった。というのも、ワッキー自身が、その異国情緒のある名前をいたく気に入っていたからなんだ。

「誰が初めにつけたんだろうなあ。おれはね、古いモノクロの、ひょっとしたら無声映画の頃のさ、映画スターの名前じゃないかって気がするんだよ。もちろん主役の二枚目なんかじゃない。そんなにずうずうしくはないさ。ワキ役なんだな。といっても端役なんかじゃない。主人公の恋の仲立ちをしてやったりとかさ、友達の身代わりになって撃たれて最後にみんなの涙に送られながら死んでいく、そんな感じさ。なあ、知ってるんだろう？ 教えてくれよ」

こんなふうに、ちょっとはにかんだ目をキラキラさせながら言うワッキーに対して、「アダ名の由来？ 自分のワキの下に鼻をつっこんでみれば、すぐにわかるぜ」なんてことは、とても言えやしない。みんな肩をすくめて、「さあ知らないな。でも古い映画を見るときには注意しとくよ」と笑いながら答えるのが不文律になっていたんだ。

というのもワッキーは、こと風下にいるかぎり、じつにデリケートな魂を持ったいい奴だからだ。そのことはみんなが知っていた。

ワッキーだけは、どこかの道で轢（ルビ ひ）かれていた猫の話にだって心から涙を流すことができる。それも偽善たらしかったり、女々しかったりする涙じゃない。ただみんなの心の奥を、しん、とさせる、そういう涙を流すのだ。ワッキーの涙には誰も勝てない。自分の心の一番良い部分を思いださせられてしまうからだ。だからマスターもワッキーが一番隅の換気扇に近い席にいるかぎりは、じつに丁寧に接していたのだった。

ただひとたびワッキーが風上にくると、たいていの人はこの臭いは凶器と言ってもいいんじゃないかという気になる。とにかく「ハンマーで殴られたよう」なんてもんじゃない、「ハンマーそのもの」の破壊力を持っているのだ。

むろん、みんなも手をこまねいていたわけじゃない。なんとかできないものかといくつもの方法を試してはみたんだ。

しかしね、シャワーを浴びても二分ともたずに臭ってくる。制汗剤などなんの役にもたたなかった。消臭剤にまで移り香するにいたっては、誰もがお手上げだった。医者やワキ

が専門の治療院に連れていったところで、すでに回状が回っていて、受付で断られてしまうありさまなのだ。

しかし不思議なのは、香水をつけてみたときだったよ。

知っての通り、香水ってのはそれ自体でもいい匂いだけど、本人の体臭と合わさって、はじめてその真価を発揮する。もしもこの相性が悪ければ、どんな高価な香水も、その人にとっては価値がないというわけだ。

ワッキーのワキガは、香水と混ざると特殊な化学反応を起こすようだった。その結果、必ずなんらかの食べ物の匂いになってしまうんだよ。

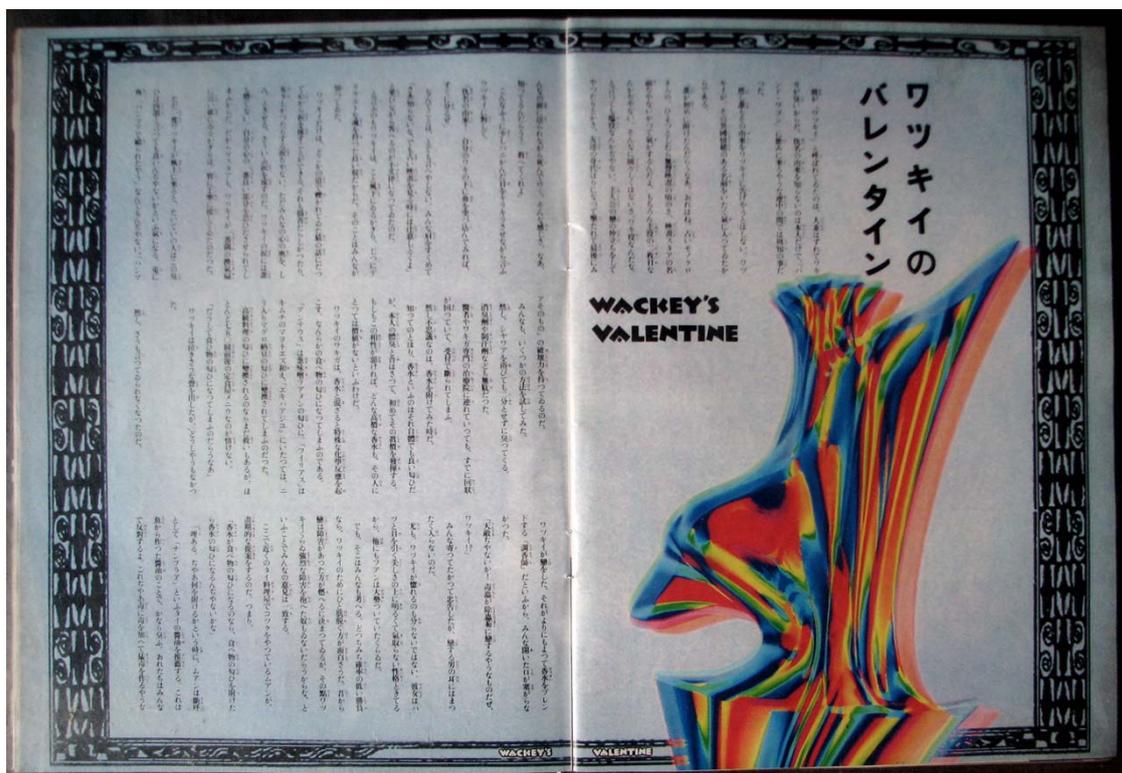
「アンテウス」はネギ味噌ラーメンの匂いに。「フィリアス」はキムチのマヨネーズ和え。

「エキパージュ」にいたっては、ニラ入りマグロ納豆の匂いに変換されてしまうのだった。

高級料理の匂いに変換されるのならまだしも、ほとんど七五〇円前後の定食屋メニューなのが情けない。

「どうして食べ物匂いになっちゃうんだろうなあ」

ワッキーは泣きそうな声を出したが、誰も、どうしようもなかった。



しかし、そうも言っていられなくなった。

ワッキーが恋をしたのだ。それがよりもよって香水をブレンドする「調香師」だとい

うから、みな開いた口がふさがらなかった。

「天敵じゃないか！ 毒虫が除虫菊に恋するようなものだけ、ワッキー!？」

みんな寄ってたかって忠告したが、恋する男の耳には届かない。

もっとも相手は、ワッキーが我が身を省みずに惚れてしまうのも無理がないくらい魅力的な女性だった。パッと目を引く美しさの上に、明るくて気取らない性格ときてるから、他にもファンは大勢ついていくらしいだ。

だがまあ、そこはみんなも考える。競争率が高く、どっちみち確率の低い勝負なら、ワッキーのためにひと肌脱ぐ方が面白そうだ。昔から恋は障害があった方が燃えるに決まっているが、その点ワッキーくらい強烈な障害を抱えた奴もいないだろうからな、ということでもみんなの意見は一致する。

しかしあの匂いだけはなんとかしなけりゃまずいだろう。ここで近くのタイ料理屋でコックをやっているムアンが、画期的な提案をするのだ。つまり、

「香水が食べ物の匂いになるのなら、食べ物の匂いをつけたら香水の匂いになるんじゃないかな」

一理ある。じゃあ何をつける？ ムアンは断固として「ナンプラー」を推薦する。これは魚から作ったタイの醤油のことで、かなり臭う。おれたちはみんな反対するよ。これじゃあ毒に毒を加えて猛毒を作るようなものなんじゃないか？

だが、料理人の臭覚ってのは馬鹿にできないね。ナンプラーがワッキーの体臭と混ざると、生臭さはいっぺんに消えた。それどころか、ワッキーはなんとも甘い、上質のココナツミルクのようなセクシーな匂いに包まれたのだ！

「ありがとうありがとう！ やっとオレも目鼻のついた人間になれたような気がするよ！」

ワッキーは、うれしそうな顔でみんなにお礼を言って回ったものだった。ワッキーみたいに心根のいい奴が喜ぶ姿は、みんなの心の中をほんわか暖かくする。みんなはこれから心からワッキーを応援することを誓いあったのだった。

強気になったワッキーは、いまや堂々と風上に立つようになった。マスターもうるさいことは言わない。ワッキーは気のいい奴だし、顔の造りだってそれなりだ。おまけに素敵な匂いと自信まで手にいれた今となっては、彼女と仲良くなるのだってそんなに難しいことじゃないはずだ。

彼女は初め「それまで鼻にしたこともないような上等のコロン」に対する、職業的な興味から話し相手になっていたようだけど、みんなのさりげないフォローも効を奏して、たちまちロマンティックな気持ちになってしまう。一週間もすると、ワッキーの腕の中でうっとり抱かれている彼女の姿が見られるようになる。

おれたちはワッキーに幸多かれと祝杯をあげ、マスターはうまく行かない方に賭けていた連中から金を巻き上げて、おれたちに分配することになる。

しかし結論から言うと、この幸せは長く続かなかったのだ。

バレンタインデーの次の日に、ワッキーは小さな瓶を持って『バンド・ワゴン』にやってきた。ワッキーが言うには、それは彼女が特別に調香してくれた香水なのだという。彼女の部屋に招待され、ステキなディナーもすんだあと、ワインを傾けながら彼女はこう言った。

「バレンタインのプレゼントに、私が心を込めて調香したのよ。いまの甘い香りも素敵だけど、もっと男性的な強さを出したつもり。ベンガル虎が雌を誘うときに出す特別な脂、それも成獣になる直前の、いちばん澄んだ香りのものよ。めったに手に入らないんで、苦労しちゃった」

「ありがとう」とワッキーは毒リンゴでも差し出されたような表情になる。「けど、言っただろ？ 僕のは香水の匂いじゃないんだ。その…… 体臭の一種みたいなもので……」

「そうね、あなたはそう言っていくら聞いても教えてくれなかったわ。でも私はプロよ。そんな体臭はありえない。匂いの質が違うもの」

「でも……」

「聞いて」

彼女はワッキーの手をしっかりと握って言った。

「私は自分の仕事にすべてを賭けてるわ。私は、パートナーになってくれる人には、そこをちゃんと理解してほしいの。もしあなたが遊びじゃなくて、真剣に私とのかことを考えてくれてるのなら、お願い、この香水をつけてちょうだい」彼女の顔は、期待と自信と愛情に満ちあふれて、その美しさを何倍にも増大させていた。「大丈夫、絶対あなたに合うはずよ」

ワッキーは返す言葉も見つからないまま、彼女の部屋でシャワーを浴びる。そしていちかばちか、祈るような気持ちで香水をつけると、期待に胸膨らませている彼女の前に立った。

「彼女は一気に窓まで飛んでいったよ」

ワッキーはぐずぐずと泣きながらおれに言う。

「『一〇〇種類の毛虫をミキサーにかけたような匂いだわ』だってさ。さすがにうまいことを言うよ。自分でもちょうどそう思ってたところだったんだ。久しぶりに嗅いだ体臭は、そりゃひどいもんだったよ。ワッキーなんて洒落（しゃれ）たアダ名が恥ずかしくなるくらいさ」

そんなことない、おまえは今だって昔と変わらずワッキーと呼ばれるにふさわしい男だ、とおれたちは言ってやる。ワッキーは力なく笑って、久しぶりに、あの心にしみるような涙を流す。ワッキーが誰かのためでなく、自分のために泣いたのはこのときが初めてだったんじゃないだろうか。

後から入ってきた連中は、また一番風下の席に座り、香水瓶を手にもたれているワッキー

を見つける。みんな心配して自分の席にワッキーを呼ぶよ。ワッキーは涙を拭きながら席を移って、また初めから話し始める。話し終わるとまた別の席の客がワッキーを呼ぶ。それが何度も繰り返されたので、店中にはまたたく間にワッキーの懐かしい、しかし強烈なワキガの臭いが充満することになる。でも誰一人文句を言う奴はいない。マスターも黙ってグラスを拭いていたよ。換気扇をそっと「強」に上げたほかは。

